
Hero of another world

バルコリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hero of another world

【Nコード】

N1602U

【作者名】

バルコリア

【あらすじ】

どこにでもいる大学生、大角亮は、ある日突然異世界へと飛ばされてしまった。

その世界はやたら自分の世界と似ていて、やたら違って……。拳句の果てには戦争！？ って話です。

タイトル変更しました。

第一話：＜異世界は良い世界？＞（前書き）

改訂版です。衝動的に書きたくなってしまったので書いております。
お暇な人はどうぞ。

6・20 最後の方を修正

第一話：＜異世界は良い世界？＞

季節は初夏。快晴にして猛暑。それがその日の事だった。

小学生が公園で遊んでいる姿や、中高生のカップルが道端でイチヤイチヤしている姿が目に入る。俗に言う夏休みだろうか。何にせよ、見える顔全てが幸せそうに笑っている。さんと降り注ぐ太陽の光がそう見せているのかも知れないと錯覚するほどに。この時だけは平和なのだろう。……………当事者たちは。

そんな中、一人の男が浮かない顔で歩を進めていた。前髪が若干長いが、日本人らしい黒髪を生やしている。ジーパンを履き、半袖のシャツを着ており、よく言えばシンプル。悪く言えば地味な格好だ。彼の名は大角^{おおすみ} 亮^{じやう}。今年で二十歳になる大学生だ。

何故亮が浮かない顔をしているか？ 理由は簡単。彼はもともとポピュラーな言い方で言うならば、モテないのだ。彼女いない歴イコール年齢の彼にとってみれば、周りの風景は嫌みにしか見えないのである。

「……………リア充死ね」

ボソツと言った言葉は誰の耳に入る事も無く、風にかき消される。リア充……………つまり、リアル（現実）が充実している者のことを指

す。その定義が、一体どのくらいなのかは個人差があるだろう。しかし、決して彼は充実していない訳ではない。友人もそれなりに居るし、優しい両親もいる。大学生活も楽しいと思っている。だが、それでも羨ましい事には変わりなかったのだ。

「……さつさとあいつの家に行こう」

気を入れ直したかのように、亮が呟く。

あいつとは、亮の友人の一人の事である。勿論、男だ。今日、彼らは遊ぶ約束をしていた。なんでも、その友人が新しいゲームを買ったそうで、それをみんなでやろう……と言う事らしい。

少し足早にカップルたちの横を歩く。見たくもないし、絡まれても厄介だと判断したから。カップルたちから見れば、亮のような存在は歯牙にもかけないのだが、彼からしてみればそれでも恐怖なのだ。

「ふう……リア充は怖いねえ……ん？」

無事に通り抜けられたことに安堵し、ため息をついた瞬間、亮は<異変>に気が付いた。

先程まで聞こえていた子供の遊ぶ声や、カップルののろけ話なども、一切聞こえないのだ。まだそれほど離れたわけでもないのに。それだけではなかった。公園にある噴水はその飛沫が空中で静止し、忙しそうに通りを歩くスーツ姿の会社員たちは、人間では絶対にバランスを保てないような格好で動きを止めている。そう、空気が<止まって>いた。

最初は何が起こっていたのか理解できなかった亮も、だんだんとその異様さに頭を覚醒させた。

「なんだ……これ……」

後ずさりながら引き攣った顔で、声を小さく漏らす。そして、もう一つ異変が起こった。

急に、本当に急激に瞼が重くなったのだ。先程まで……ほんの数秒前まで混乱と焦りでいっぱいになっていた筈の亮の能を、今支配しているのは謎の眠気だった。

よろよろと足元がふらつく。とてもじゃないが立っていられない。そばに有った柱に手をつけ、そのままずると腰を落としてしまふ。

「うぐ……眠すぎワロタ……って、ふざけんじゃねえぞ……！」

眉に皺を寄せ、いつもは使わない悪態をついてみても状況は変わらない。それどころか悪化する一方であった。

彼の必死の抵抗も空しく、いよいよをもつて危なくなってきた。最早、亮の頭の中では何も考えられない。目の前がぼやける。ぐるぐると眠気が回る中、彼は小さな声を聞いた。

——いらっしやい——

そんな軽い女の子の声を聞きながら、彼の意識は深く深く沈んで行った。

数時間後、とある男の搜索願が出された。名は、大角 亮……と書かれていた。

「ク……………！」

とある森の中で一人の少女が一本の木にもたれながら苦しそうに、そして悔しそうに声を漏らした。

腰まで伸びた幻想的な銀髪。整った顔立ちの中にある気の強そうなツリ目の瞳は、碧く澄み切っている。

そんな少女は今、窮地に立たされていた。彼女はレザーアーマーのような防具を着ているのだが、その所々が引き裂かれたように切れており、そこから覗く白く透明だったはずの肌も赤い血を流している。その痛みからか、それとも疲労からか……顔には多量の汗が

滲んでいた。

「……通信途絶。私以外はもう……覚悟はしていたけれど……まさかナイトの教官まで殺られるなんて……」

小さく呟いた声には、絶望の色が見えた。信じられない、信じたくないという気持ちの。

今日、彼女は<とある演習>に来ていたのだ。事前情報では危険度の少ない、比較的簡単なはずだった。しかし、蓋を開けてみたらどうだ。最早、彼女以外の隊員は一人も生きてはいない。

ゆっくりと呼吸を整えながら、少女は状況を確認し始めた。自身の体に触れ、そして冷静に考える。

——体力は残り僅か……コアに至っては魔力残量がゼロに等しい……ホントに絶望的ね——

自嘲気味に笑みを浮かべる少女。その顔は、このような場所であればそれは映えたであろう。

「……………！」

何かの気配を感じ、彼女が身構えた瞬間、草むらから黒い影が現れた。身構えたのが無意味だったかのような、異常な速度で。

彼女の三倍はあろうかと言うほどの巨体。その体軀には黒い剛毛が生えている。振り上げられた足には鋭利な爪。そして巨大な口には何もかもを噛み砕きそうな牙。

少女は訳が解らなかった。この男は誰だ。何故ガリユベーラは倒れている。そんな疑問が彼女の能の扉を叩く。答えは出せないでいた少女だったが、一つだけ思い出した事があった。

——ガリユベーラは圧倒的速度と噛み付きが武器だけど、確か弱点が……打たれ弱い、だったわよね——

そこから導き出される答え。目の前に転がっているガリユベーラと亮の位置と、彼の痛がり方から推測するに……彼の脳天がガリユベーラの脳天に落とされた、と思うのが妥当であろう。何がどうなつてそのような事になったのかは不明だが。

その答えに行きついた少女は、亮へ歩むよると体をかがませて口を開いた。

「あの、大丈夫ですか？」

「え？」

柔らかく美しい少女の声を受け、亮は転がるのを止めてそちらを見た。そしてその少女の美しさに数秒だが思考が止まった。

急に無言になった彼の事を不審に思った少女がもう一度安否を尋ねると、今度こそ亮は詰まりながらも返答をする事ができた。

まだ痛む頭を振りながらゆっくりと立ち上がる。そこでやっと気付いた。先程まで居た大通りとは景色が一変しており、いつの間にか自分が森の中に居ることに。そして近くで横たわる黒い大きな犬のような化け物——ガリユベーラ——に。彼の体感で数分前に、大通りで異様な光景を見たときの驚きに負けないほど驚愕した。どこ

だここは。なんだこいつは。そう自身に聞いても帰ってくる答えなど無い。

亮の頭を今度は痛みではなく、混乱が襲う。仕方がないだろう。誰だっけいきなりこんな場所で目が覚めれば混乱する。自然と辺りを落着きなくきよろきよろと見回してしまう。

「あの……本当に大丈夫なんですか？」

「えーっと……なんて言うか……大丈夫だけど、大丈夫じゃないというか……ここってどこですか？」

「はい？」

何をどう言えいいか迷いに迷った拳句、亮はこの言葉を出した。現状で最も重要な事は場所の確認だと思ったのだ。この選択は、あながち間違いでない。場所が解れば、この後どう行動するかも決められる。それに足して、自分が知っている地名だったならば、比較的簡単に帰る事が出来るからだ。一番簡単なのは携帯などのGPSを使う事なのだが、残念なことに、彼の携帯は旧式でその機能が付いていないのだ。………付いていたとしても、この木々が鬱蒼と生い茂る森の中では何の意味もなさないと思われるが。

「いや、だからここに地名を……」

「……アルカイスの領土の北アルカイスですが……」

「は？」

今度は、亮が気の抜けた返事をする番だった。目を大きく開き、口をポカンと開けたその顔は、間抜けとしか言いようがない。

「あ、あの！ き、北アルカイスってどこですか！？」

「アルカイス王国の北に位置する町ですけど」

「アルカイス王国！？」

遂に亮が大声を上げた。そう、そんな国は無いのだ。彼は特別頭の良い方ではないが、馬鹿でもない。そのくらいは知っていた。

しかし少女には、何故目の前の男がいきなり大声を出し、そして驚いたのか解らなかった。彼女にとって、アルカイスと言う地名は知っていて当然、むしろ知らないとおかしい物なのだ。首を傾げてしまう。

「いや、首を傾げられても……あ、日本って知ってますか！？」

「ニホン……？ 何ですかそれは、国の名前ですか？」

「（まさか……いやそんな……でもでも、これってやっぱ）……
…この星の名前って地球ですよね」

恐る恐る、何かを確かめるような感じで問う。

「チキユウ？ 何言ってるんですか。グランディアですよ？ 子供でも知ってます」

「……………マジかよ」

疑問が確信に変わった事で落胆し、肩を落とす。彼は元々嫌な予感を感じ取ってはいた。先程の大通りでの謎の体験。いつの間にかいた森。この世のものとは思えない化け物。その全てが、リアルである訳が無いのに、リアルなのだ。

——ゲームじゃねえかよ………こんなの………——

意を決した亮は、目の前の少女へと迫る。

「あのっ」

「……なんでしょう」

先程から亮に訳のわからない事を言われ続け、少しだけ不審がった声を少女は上げた。

だが、そんなことはお構い無しに彼は続ける。

「俺、この世界の人間じゃないかも知れません……」

「………はい？」

今度は少女が間抜けな顔をする番だった。……元が良いのでそれも可愛くなっていたのだが。

亮は自分の知りうる全ての事を話した。自身の世界の事。大通りでの謎の体験。あのような大きな怪物——ガリユベ——など存在しない事。それらを信じてもらえるよう、身振り手振り一生懸命に伝えようと奮闘した。

しかし、彼とて解っていた。いきなりこんな事を言われても信用してくれないだろうと。亮自身、見知らぬ人にこんな事を言われても信用する気にはならない。

「……信じられません」

「………やっぱり？」

「ですが……」

「ですが？」

少女は少し俯き顎に手を当て、何かを考えるように目を閉じた。

「……あなたの言う事が嘘とも思えません」

彼女にも、何故だかわからなかった。身ぶり手ぶりの必死の説得がそう思わせたのか。それとも別の何かか。何にせよ、彼女は彼の言う事を無下にしたくは無かった。

亮はまさか信じてもらえるとは思っていなかったので、少女の今の言葉に驚愕し、そして感動した。目の前の少女は先程から平然と振る舞ってはいるが、傷だらけなのだ。衣服は引き裂かれ、鎧は砕け、血が流れている。見たいるだけでこっちが痛くなりそうなものだ。しかし、それなのに彼女は自分の事を信用してくれた。感謝と感動以外の何でこの感情を表せばいいのか亮は解らなかった。

そんな亮の姿を見て、信じて正解だと思った少女は顔を上げ、微笑みを浮かべて言った。

「私はラティーシャ・マリーと言います。とりあえず、ここは危険ですので<育成機関>まで戻りましょう。そこでもう少し色々教えてください」

「あ、ありがとうございます！ 俺は大角 亮……リヨウ・オオスミって言います！ よろしくです！」

ラティーシャがリヨウに握手を求める。

特に断る理由も見当たらないし、この様な美少女と手を繋げるなんて幸運この上ないと思った彼は、すぐにその手を握り返した。

その瞬間、ラティーシャが糸の切れた人形のように膝から崩れ落ちた。リヨウは驚きながらも、咄嗟に手を出して受け止める。彼女の顔を見ると疲れからか、出血のし過ぎからか真っ青になっていた。リヨウは慌てて声をかける。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ご、ごめんなさい……安心したら急に力が抜けちゃって……」

彼に心配無いと言い聞かせるように微笑む。しかし、その顔は相変わらず青い。

リヨウは数秒迷うと、決心したかのように頷くと、腰を落として彼女を背負った。

ラティーシャの顔が驚きに染まる。

「な、なにを……」

「ここにいたら危険だと思っんです。あの変な化け物もそうですし……またあんなのが来たら終わりです。だから俺が背負って、その<育成機関>とやらに行きます！」

有無を言わさない言い方。リョウが生まれて初めて女性に強く言った瞬間だった。

ラティーシャは少し顔を赤らめて恥ずかしがるような態度を取ったが、彼女も彼の言い分が尤もだと思い、決心したのか深呼吸を数回した後には頷いた。

「……………解りました。それでは私の言う方向に進んでください。大丈夫です、そんなに離れていませんから」

「了解です！」

力強く返事をし、リョウは歩き出した。まだ見ぬ異界の地を。

——ここで御姫様抱っこができれば、俺もリア充になれたかなあ

……………

第一話・＜異世界は良い世界？＞（後書き）

誤字脱字、指摘などお願いします。

第二話・くりヨウの受難（前書き）

本格的^o投稿遅れ。

と言いますか、小説書くの難しすぎワロリーヌwww

第二話・<リヨウの受難>

「つ、着いた〜！」

ラティーシャを背負って歩き、一時間は経った頃。ようやくといった感じでリヨウが声を上げた。

彼らの目の前に有ったのは、森の少し開けた所に佇む小さい城だった。小さいと言っても飽くまでそれは映画などで見る城と比べての事であり、灰色の城壁に囲まれ、来る者を拒むかのように佇む大きな門があるそれは、普通に見れば大きいのに変わりはない。更に、城の横には大きなグラウンドがあり、反対には大きな噴水のある公園が設置されている。

疲れを感じていたリヨウであつたがこの城を見た瞬間だけは、驚きと歡喜に似た感情のおかげで疲れを忘れる事ができた。

「あ、ありがとうございます……大丈夫ですか？」

ラティーシャが、リヨウを気遣うような優しい声で聞く。

本心を言うと、リヨウはクタクタだった。女性にこんな事を言うのは失礼かもしれないが、彼の予想以上に彼女は重かったのだ。恐らくはラティーシャの着込んでいるレザーアーマーが原因だと思われる。

しかし、彼とて男の子。可愛い女の子にこんな事を言われれば見栄を張らない訳にもいかなく……。

「だ、大丈夫ですよ！ さあさあ、中へ入りましょう！」

「あ、も、もう歩けます！」

「いえいえ！ それより、ここって真正面から入れますか？」

「入れますけど……って、待ってください！」

背負われた状態で少し騒ぐラティーシャにリヨウは笑顔でもう一度断った。もう歩けないほどとは言わないが、まだ疲れているだろうと思ったのだ。

観念したラティーシャは、小さく「済みません」と呟く。それを感じ取ったリヨウは、「わかりました」と小さく言うと、門へ歩き出した。一時間もの間、鎧を着た少女を背負ったまま歩き続けてフラフラな足を一歩、また一歩と。

門の前まで来ると、門番と思われる槍を持つ大きな甲冑を身に纏った二人が、リヨウの元へと駆けて来た。

「お、おい君……その娘は……マリー訓練兵じゃないか!？」

「ほ、ホントだ!　生きていたのか!？」

門番が驚いたように声を荒げる。兜のせいかな籠っていたが、その声でリヨウは目の前の二人が男だという事を理解する事が出来た。彼らに答えようと、リヨウに背負われているラティーシャが顔を伸す。

「ラティーシャ・マリー訓練兵です……只今帰還しました」

悲しみの混じった声。その顔も少しばかり歪んでいる。

それだけで二人の門番は察したのか、小さく息を詰まらせると小声で彼女に謝罪した。

何故ラティーシャがここまで悲しんでいるのか。何故二人の門番は謝罪をしたのか。リヨウは訳が解らず辺りをキョロキョロと落ち着きなく見る。その姿に気が付いた門番の一人が彼に声をかけた。

「そう言えば……君は一体誰だね?　いや、今はそんな事はどうでもいいか。とにかく、よくここまで彼女を運んでくれた。礼を言う。後は我々に任せてくれ」

もう一人の門番も頷く。しかし、その申し出を断ったのはリヨウ

では無く、ラティーシャだった。

「ごめんなさい。彼には申し訳ないのですが、パラディン・ローウエルに会って貰いたいので……通して貰えないでしょうか？」

申し訳なさそうに眉を八の字にして言うラティーシャのその言葉は、またもやりヨウにとっては聞きなれないものだった。

だが、聞きなれている門番の二人も、この言葉には戸惑った。

基本的にここ、＜育成機関＞は一般市民にもオープンな場所である。理由としては市民に国の為に戦おうとしている者が居ることを知ってもらう為に、と言うのが挙げられる。

しかし、今は一つの訓練兵団を失ってしまったという非常事態の最中だ。その中で一般市民を機関内に通すほど馬鹿な組織でも無い。だが、それと同時にラティーシャが無駄な事をするとも門番は思えなかった。成績優秀、品行方正と機関内でも彼女の評価は高かった。故に彼女に対する信頼は厚かった。そしてこの門番たちも、彼女に信頼を寄せている者たちの一部である。

「……わかった。マリー訓練兵が言うのなら間違いないのだろう。おい、門を開ける」

数秒悩んだ末、門番の一人がりヨウの顔を見ながらそう言った。その言い方から、苦渋の選択だった事が感じ取れる。

「い、良いのか？」

戸惑いの声を上げるもう一人の門番だったが、開けるように言った門番が頷くのを見て、渋々と言った様子で門を開く為の機器を作動させた。

機械仕掛けの歯車がくると回り、門を引き上げるための綱を巻き上げていく。数秒も経たないうちに、その大きな門は開け放たれた。

「ありがとうございます。……オオスミさん、行きましょう」

「え？ あ、はい」

一連の動作を見惚れたように眺めていたリヨウも、彼女の言葉で我に返り、そのまま城の中へと歩を進めた。彼らの見えない視線が怖かったのか、頻りに二人の門番に頭を下げながら。

中に入っても驚きの連続だった。リヨウの身の丈を優に超えている程の大きさを持つ絵画がこれ見よがしに並んでおり、至る所に生け花のような物が添えられている。さらに天井には、彼がテレビでしか見た事の無いシャンデリアが、床には歩くたびにその柔らかさを感じさせてくれる真紅のカーペットが敷かれていた。まさに、物語の中の城だった。

「すっげえ………こんな初めて見た………」

「オオスミさんの居た世界にはこの様な城は無かったんですか？」

「いや、なかった訳ではないんですけど……見る機会が無かったというか……」

ラティーシャの問いに、はぐらかす様にハハハと笑いながら答えるリヨウ。内心、こんな物を毎日見る事の出来るラティーシャを羨んでいたが。

そもそも、このような物を見る機会がある人間が一体どれほどいるのだろうか。確かに見る事のできる人間の方が少ないだろう。それほどまでに、素晴らしかった。

周りの装飾を見ながら歩いていると、リヨウは一際大きな扉の前に出た。扉に施されている装飾からして、他の部屋よりも重要な場所だということが見て取れる。

「オオスミさん、ここで降ろして頂けますでしょうか？」

不意に、ラティーシャがリヨウにそう言った。

ここで降ろしても良いのか、体は大丈夫なのか。彼女の顔を見てもみる。リヨウの素人目で見ると、大して具合が悪そうに見えない。しかし、不安になったリヨウは、気遣う様に彼女に問いかけた。

「えーっと……体は大丈夫なんですか？ 辛いなら俺はまだまだ……」

「いえ、お気遣い感謝します。ですが、この部屋に入るとなると、身なりを正さなければいけないのです」

リヨウの言葉を遮り、背負われた状態で頭を下げて、ラティーシヤはそう言った。ほんの少しの笑顔を浮かべて。

その顔を見て、思わず心臓が高鳴るのをリヨウは感じた。現に顔が赤くなっている。二十年と言う月日を生きて来た彼だったが、ここまで女性に心が揺れ動かされたのは初めてだった。単に、ラティーシヤの顔が好みだったのか、その慎ましい性格が好みだったのかは彼自身も良く分かってはいないのだが。

「わ、わかりました……」

リヨウは顔を伏せて、呟くように言うと、ラティーシヤをゆつくりとその背中から降ろした。

地面に降りた直後、若干ふらついたラティーシヤだったが、すぐに体制を直して大きな扉の前に立った。

危なげないその動きに、内心ハラハラしながら見ていたリヨウだったが、ふと大きな扉に掛けられたネームプレートに気が行った。

綺麗な木彫りの全く読めない文字の羅列。当たり前だ。この世界は彼のいた世界とは違っただ。しかし、その文中で異彩を放つ文字が並んでいた。

「(Palladin・Lowell? 英語……?)」

そう、英語だった。全く読めない字の中の一文だけに、英語が使

われていたのだ。

何故、どうして。リヨウの頭を廻るその疑問に答える者はいない。

「失礼します。第十八訓練兵团所属、ラティーシャ・マリー訓練兵です」

突然上がった大きなノック音と声。それは、一気にリヨウの頭の中の疑問を吹き飛ばした。

驚いているリヨウに気が付いていないのか、ラティーシャは続ける。

「パラディン・ローウェル。いらっしゃいますでしょうか！」

ここでリヨウは気が付いた。先程のネームプレートに彫られていた唯一の英字、<Paladin・Lowell>とは人の名前だったという事に。

思い出せば、彼には心当たりがあった。一時期、リヨウは中世ヨーロッパなどの情報を調べていた時期があった。それがかつこいと思っていたのだ。その時に、<パラディン>と言う単語を目にしていた。簡単に言えば、パラディンとは高位の騎士、王族直下の騎士などを指す言葉である。つまり、この<パラディン・ローウェル>と言う人物は、もしかしたらかなり高位の者なのかも知れない、と言う結論にリヨウは至ったのだ。

少しだけ、彼の体に緊張が走る。

「……………入れ」

中年男性の深い声が、部屋の中から聞こえた。

ラティーシャは振り向き、リョウに小さく「付いて来てください」と呟くと、部屋の扉を開け、中へと歩を進めた。

付いて来い、と言われて行かない訳にもいかないリョウは、少し冷や汗を流しながら、ラティーシャの後ろに付いて部屋に入る。

中に入ると、大きな木のデスクが部屋の真ん中に設置されているのが見えた。そしてそこに座る、白の軍服をその身に纏った、髭を生やした黒髪短髪の男も。

「ラティーシャ・マリー訓練兵、只今帰還しました！」

大きな敬礼。先程までの優しい顔つきとは打って変わり、今は凜々しい顔つきになっていた。

「……………御苦労。それで、報告は」

表情を一切変えずに、男は問う。その威圧感に、リョウは思わず顔が引きつった。

その問いを受け、凜々しい顔つきになっていたラティーシャは悲しそうに目を泳がせた。だが、決心がついたのかゆっくりとその口を開いた。まるで重い物が乗っているかのように、ゆっくりと。

「私を除く……第十八訓練兵団は……全員……名誉の殉職を……遂げました……」

ラティーシャの目から、涙が零れるのをリヨウは見た。それと同時に、彼女の発したく殉職>と言う言葉に驚き、目を見開く。

「（殉職って……死んだってことか？　だったらこの子は今まで……）」

そう、つまりそう言う事になってしまう。

彼女は心に隠し通していたのだ。仲間を失い、友を失った事を。不安なリヨウを無駄に揺さぶらない為に、そして怖がらせない為に、自身の悲しみと怒りを押し殺して。

それを知って、リヨウは自分が情けなく感じられた。それと同時に、こんな女の子がこんなに辛い思いをしているのに、自分が馬鹿みたいにヘラヘラしていたのが途轍もなく腹立たしくなった。

「そうか……死んだか……」

椅子の背もたれに全身を預けて天井を見つめたローウエルの乾いた呟きが部屋に響く。その様子を、ラティーシャは涙を流しながら見つめていた。不謹慎ながらも、リヨウはまたもやその顔に見惚れてしまう。

その時、不意に嗚咽が彼の耳に入ってきた。

「死んじまったのか……すまねえなあ……」

泣いていたのはローウエルだった。手で顔を抑えてはいるが、その隙間から涙が零れ落ちているのが、リヨウの位置からも確認できてしまう。

リヨウは驚く事しか出来ない。目の前に、先程までの威圧感はなく、ただ後悔する様に無く男しかなかったからだ。誰の為の涙か。誰に対しての謝罪か。そんな事を考える余裕など、リヨウには無かった。

ラティーシャも、ローウエルが嗚咽を漏らすのを見て我慢が出来なくなってしまうたのか、まるでダムが決壊したかのように涙を溢れ出した。しゃがみ込んで涙を流すそこに、先程までの強く優しい少女は、もう居なくなっていた。

リヨウはしゃがみ込み、ラティーシャの背をさする。驚いたように涙を流している顔を彼女が上げる。リヨウはそんなラティーシャにむけて笑顔を見せた。と言っても、苦笑いのようなものだが。

「えーっと……よく状況は把握出来ませんが、流石に隣で女の子が泣いてたら無視できないので……」

「……済みません……ありがとうございます」

「いえいえ」

鼻声で礼を述べたラティーシャに、彼はもう一度笑顔を見せ、まるで子供をあやすかのようにその背をさする行為を続ける。

実際は「隣で女の子が泣いてたら無視できない」と言ったような大層な理由などリヨウには無かった。ただ、気まづかっただけなのだ。同じ部屋にいるの住人が、二人揃って泣き始めれば無理もない。しかし、リヨウも人間だ。本当の事を言わずに、恰好をつけてしまうのも責められはしない。

「……俺からも礼を言う。すまねえな、本来なら部下の世話すんのは俺なのによ」

少し経った後、流すべき涙は流し終えたのか、若干赤くなった瞳をリヨウに向けて、ローウェルはそう言った。

「え、いやそんな……」

「……悪いが、今日の所はここに泊ってくれないか」

謙遜するリヨウの言葉を遮るように、ローウェルが続けて口を開いた。幾分か、申し訳なさそうな声色に聞こえる。

「えーっと……何故に？」

またしても訳が解らなくなってしまうたリヨウは、混乱しながらも彼にそう聞く。理由が無ければ従う訳にはいけないから、と判断できたのは彼にしては上出来である。

ローウエルはゆっくりとその大きな椅子から立ち上がると、リヨウの目の前まで歩み寄って来た。目の前にしてリヨウは分かった。ローウエルという人物が途轍もなく大きなことに。

身長は百九十センチはあるだろう。それだけでも大きいのだが、更に彼を大きく見せているのは、その筋肉だった。太すぎる訳ではない。だが、決して細くないその筋肉は、リヨウが昔テレビで見たアスリートよりも強靱に見えた。

そのローウエルが再度口を開く。

「お前には悪いんだが、このマリー訓練兵の所属する第十八訓練兵団は壊滅した。その時に接触したお前には色々聞かなくちゃならねえ事があるんだ」

「でも俺なんも知りませんよ？」

「それでも、だ。別に取って食う訳じゃねえから安心しろ。ホントなら今日やって直ぐに帰せんだが……それにはマリー訓練兵も参加しなきゃなんねえんだ。だが、今は精神的にきついようだ」

ローウエルの言葉に合わせてリヨウは、蹲っているラティーシャに視線を向ける。確かに、今ではまともにその時の事を思い出せそうに見えなかった。

「……そうですね」

「だろ？ だから明日までここに泊ってくれないか？ 勿論、今与えられる最高の設備で待遇する」

「……待遇云々は別としても、確かにマリーさんはキツそうですしね……いいですよ、泊らせてください」

一刻も早く帰りたいと言う意思は変わった訳ではなかったが、今はそれよりもラティーシャの事を考えたリヨウは、ローウエルの話を食べた。

ローウエルは少しかり笑顔を見せると、ありがとうと述べた。

「それじゃあもう夕方だしな。部屋に案内する……おい！ メイド！ この……そっぴいとお前の名前を聞いてなかったな。俺はアラン・パラディン・ローウエルだ」

「あ、リヨウ・オオスミです」

「そうか、ありがとうな。……オオスミを宿泊施設に連れてってつてくれ！ 部屋は来賓用のだ！」

ローウェルがそう叫ぶと、すぐに部屋の扉がノックされ、メイドらしき女性が数人中へ入って来た。

彼が偶に見るアニメにでるミニスカートではなく、ちゃんとしたロングスカートの。こんな時だが、少しだけリヨウはガッカリしてしまう。自然と肩が落ちる。

「俺はマリー訓練兵をなんとかしなくちゃならねえ。あとは彼女たちに着いて行きやあ解るさ」

「はあ……解りました」

気の抜けるような返事を返して、リヨウはメイドに誘導されるがままに部屋を出る。その際にチラッと蹲るラティィシャの様子を見たが、まだまだ泣き止みそうにはなかった。

可哀想だな、と思いながらも、彼は無言のメイドたちの背中に着いて歩いて行く。明日になれば帰る手段が見つかるはず。そう思いながら。

第二話・くりヨウの受難>（後書き）

誤字脱字、指摘などお待ちしております。
アドバースとかもできたらで良いんで……。批評でもいいです。
なんか上からですね。無視してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1602u/>

Hero of another world

2011年11月13日11時51分発行